OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ブラジル文学における日本移民の表象
Author(s)	平田, 惠津子
Citation	ブラジル研究. 2017, 13, p. 33-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106561
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ブラジル文学における日本移民の表象

平田　惠津子

はじめに

本稿は「日系ブラジル人の記憶と創造に関する研究」と題して筆者が行ってきたブラジル文学研究の一環として、20世紀初頭以降、ブラジルへ移り住んだ日本人とその子孫がブラジル文学作品のなかでどのように表象されてきたか概観し、その問題点と課題を明らかにすることが目的である。

1.　文学作品のテーマとしての日本移民

1908年6月18日、日本の契約移民158家族781人と自由移民10人を乗せた第1回移民船「笠戸丸」がブラジルのサントス港へ到着してから、100年余の歳月が過ぎた。今では、日本から遠く離れたこの南米の地に世界最大の日系社会が形成されているが、その礎を築いたのは、言葉も文化もまったく異なる土地で、劣悪な労働条件と厳しい生活環境に苦しみながらも、忍耐強く努力を重ね、そこに根をおろした初期の日本人移住者たちであった。

日本移民が新天地で果たした役割や貢献については、彼らの受け入れ国となったブラジル一般に広く認知され、アカデミズムにおいても歴史学と社会学の分野を中心に、一定の研究の蓄積がなされてきている。しかし、ブラジル文学[1]に目を向けると、困難と挫折に満ちた日本移民のドラマを物語った作

品はほとんど存在しない。あえて指摘すれば、1920年代、サンパウロを中心に興ったモダニズム文学を代表する作家たちの作品に数は少ないながらも日本移民[2]が登場するが、いずれも当時、急速な近代化によって大きく変わろうとしていたブラジル社会と自国民の姿を浮かび上がらせるために描かれた二次的な存在で、ステレオタイプで平面的なキャラクター造形の産物でしかなかった。

一方、日本人移住者自身による創作活動は移民史の初期から行われており、異国での生活風景や心情をうたった短歌、俳句、川柳をはじめ、「だれの想像も及ばないほど数多くの」（前山、204）小説も書かれてきた。しかし、日本語で書かれ、「概して強い被害者意識に包まれ」（前山、206）たそれらの作品が日系社会の壁を越えて、ブラジル文学の文脈のなかで注目されることはなかった。日本移民の物語は、日系社会の閉ざされた空間のなかでのみ語られ、伝えられるものであり続けたのである。

2. 戦後生まれの3人の女性作家たち

日本移民の歴史をテーマにポルトガル語で表現しようとする日系人作家が現れるのは1970年代以降のことである。文学ではなく、映画の分野ではあるが、サンパウロ大学で映画を専攻していた沖縄系2世のオルガ・トシコ・フテンマ（1951- ）が、1974年、サンパウロ市の日系人居住区で暮らす人々の日常の生活風景をおさめた短篇ドキュメンタリー *Sob as pedras do chão*（地面の石の下に）の制作を皮切りに、1980年、異なる世代の日系人女性に対するインタビューで構成した *Retratos de Hideko*（ヒデコの肖像）を、1985年には音楽と踊りで結ばれているサンパウロの沖縄人コミュニティーの人々を撮影した *Hia Sá Sá – Hai Yah!*（ヒア・サ・サ、ハイ・ヤー！）を制作発表したのである。これらの作品については拙稿（平田、2000、2009）で論じているのでここでは詳述しないが、いずれも当時の日系人の生活風景から切り取った断片的な映像と詩的なナレーションが融合した芸術的な作品となっている。その後、フテンマは初のフィクション映画の制作に取り組み、1988年、*Chá*

Verde e Arroz（お茶漬け）を発表した。これは、1950年代、映写機と発電機をトラックに積んでサンパウロ州内陸部の日本人居住地を旅回りの巡業で訪れていた「シネマ屋さん」と、その到着を待ち望む人たちとの触れ合いを描いたもので、フテンマの映画に対する愛情があふれる作品となっている。以上のフテンマの作品はすべて上映場所や回数が制限される短篇映画であるため、発表当時の反響について知ることは難しいが、*Hia Sá Sá – Hai Yah!* と *Chá Verde e Arroz* がそれぞれグラマド映画祭とハヴァナ映画祭に出品され受賞したほか、ルカルノやボローニャ、東京、山形などの映画祭で上映された記録が残されている。

次に、これも映画の分野になるが、チズカ・ヤマザキ（1949- ）の長篇劇映画『ガイジン－自由への道』（*Gaijin – os caminhos da Liberdade*）を取り上げないわけにはいかない。ヤマザキは日本人の父親と日系2世の母親のあいだにブラジル南部で生まれ、サンパウロ州内陸部のアチバイア市で幼年期を過ごした。早くに父親を亡くしたため、母方の祖母、母、妹の女系家族のなかで育っている。『ガイジン』はヤマザキの監督デビュー作で、1980年、ブラジル各地で上映された。この映画には、戦前、15歳でブラジルへ移住したヤマザキの祖母をモデルに、サンパウロのコーヒー農園で働くため「笠戸丸」に乗って集団移住した日本人たちがたどる過酷な運命が描かれている。そこで繰り広げられるのは日本人の生き残りをかけた文字どおり闘いのドラマであり、映画は「ブラジルにおける日本移民のサーガ」と評され大きな反響をよび、ヤマザキの名を一躍ブラジル全土に知らしめた。かつて日系社会の外側でほとんど語られることのなかった初期日本移民の苦難や屈辱、絶望を視覚的イメージによってブラジル人の心に刻み込むことに成功した点でヤマザキの『ガイジン』が果たした役割は大きい。

しかし、『ガイジン』を単に日本移民の苦難を写実的に描いた作品として矮小化すべきではなかろう。なぜならこの映画は日本人の集団移住をブラジル近代史の重要な一章として位置づけようと試みると同時に、女性を中心に日本移民の歴史を語りなおそうとするものだからである。ヤマザキは、異文

化衝突によって引き起こされる混乱という大きな物語のなかに、日本人集団の内部に生じる夫婦間や世代間の葛藤を表わしたいくつもの小さな物語を織りこんだ。そしてこれらの物語を交錯させながら、異なる民族間に相互理解や友情が芽生えていく過程を描き出している。そして、その中心に置かれたのがヒロインのチトエをはじめとする女性登場人物たちなのである。この映画には、1960年代後半以降、アメリカを中心に展開した第二次フェミニズム運動の影響が色濃く反映されているといえよう。

文学の分野では、ヤマザキ、フテンマと同世代のラウラ・ホンダ・ハセガワ（1947- ）の長篇小説 *Sonhos bloqueados*（断たれた夢）が特筆に値する。サンパウロ市に生まれた日系2世のハセガワは、サンパウロ大学でポルトガル語とポルトガル・ブラジル文学を学んだ後、中等教育機関でポルトガル語教師として勤めながら文筆家としても活動し、現在に至るまで日系の新聞や雑誌に投稿したり、文学作品を執筆したりしている。ハセガワは *Sonhos bloqueados* で本格的な作家デビューを果たし、続いて2002年に、短篇小説"Um certo Hiroshi passou por aqui"（ヒロシとかいう男がこのあたりにやってきた）を発表する。この作品は、民族的出自を異にする作家たちの作品を集めた *Pátria Estranha: Histórias de Peregrinação e Sonhos*（奇妙な祖国：遍歴と夢）に収められているが、同じ短篇集には、現代ブラジル文学を代表するモアシール・スクリアール（1937-2011）の作品も掲載されている。

ハセガワの代表作 *Sonhos bloqueados* は、サンパウロ州内陸部の小さな町で暮らす日系二世の主婦キミコが語り手となって、自らの半生ー子どもの頃の話、サンパウロ市で美容師として働いていた独身時代の話、結婚、子育て、夫との死別を経て、日本へのデカセギを決意するまでの話ーを回想する物語で、「家族について」、「リベルダーデについて」、「過去の小さな喜びと想い出について」、「それぞれ離れて」というタイトルがつけられた四つの章と、日本へ向かう機上の人となったキミコが語る短いエピローグで構成されている。サンパウロの閉鎖的な日系社会で生きる人々、とりわけ女性たちの日常が丁寧に描かれており、ブラジルで女性として、また、エスニックマイノリティ

ーとして生きることの意味について考えさせられる。

ここで挙げた同世代の 3 人の作家たちに共通するのは、ニュアンスの違いはあるものの、男性中心に語られてきた日本移民の歴史を、女性の視点や立場から語りなおそうとしているところにある。彼女たちの作品世界に深く踏み入るには、当時の日系家族のあり方や、ブラジル社会における女性の生き方など、女性が置かれていた時代的な背景を理解する必要があるであろう。

3. 新しい世代の日系人作家たち

2011 年 2 月、パラナ州アプカラナ市在住の日系ブラジル人三世、オスカル・フサト・ナカザトが書いた小説 *Nihonjin* が、第 1 回ベンヴィラー文学賞を受賞した。この賞は、ブラジルの大手出版社サライヴァがブラジル文学の振興を図って、新しい才能を発掘するべく創設したもので、受賞作には出版が約束されていた。ブラジル国籍を持つ作者によってポルトガル語で書かれた未発表の小説であることを応募資格とするこの新しい文学賞には 1,900 を超える作品が寄せられ、そのなかから選ばれたのがナカザトの *Nihonjin* であった。同年、刊行され書店に並んだ *Nihonjin* は、翌 2012 年、ブラジル出版界において最も権威ある賞として知られているジャブチ賞の小説部門で受賞の栄誉に浴した。ブラジル国内の各メディアがナカザトの受賞を日系人初の快挙として報じたが、とりわけ日系社会は大きく沸き、2015 年、その邦訳『にほんじん』[3]が出版されるに至っている。

Nihonjin は、高校教師としての職を捨て、デカセギとして日本へ発つ日を目前に控えた日系 3 世のノボルが、1920 年代にブラジルへ移住した祖父ヒデオ・イナバタの半生について、祖父自身やおじから聞いた思い出話をもとに物語るという話である。1 枚の古い写真をきっかけにノボルが紡いでいく物語は、若かりし頃の祖父のヒデオがブラジルへ向かう移民船に乗り込むときにさかのぼる。船のなかでヒデオが同船者たちと語り合う夢や不安、ブラジルに到着して直面する厳しい現実、祖国日本への思い、第二次世界大戦中、連合国側についたブラジルで暮らす不安に満ちた日々、価値観の異なる親と子

の衝突－これらはひとりの日本移民の物語であると同時に、多くの日本移民に共通する記憶として残る歴史的体験である。

ナカザトの *Nihonjin* がブラジルで広く注目されるきっかけを作ったベンヴィラー賞を受賞した際、審査委員会は以下のコメント[4]を受賞の理由として発表した。

> この小説は、何よりもまず、我々の文学にほとんど不在のテーマである日本移民の歴史を雄弁に再構築したものである。その文学的な価値は、直截的な言語表現や登場人物、試練にあるだけではなく、読者の心を揺り動かす力にある。ナカザトの小説は、民族的出自に関わりなく、あらゆる読者を感動させ、登場人物や描き出された苦しみに強い共感を覚えさせる。　（傍点筆者）

Nihonjin の価値がまずテーマの新しさにあることを指摘したこのコメントは、裏返して言えば、かつてブラジル文学において日本移民の物語がほとんど語られてこなかったことを提示する。さらに、「本作品は個人史であり、ブラジル文学、さらには歴史学においてさえ、ほとんど研究されてこなかった時代と場所で多様なブラジル文化が誕生したことを見せてくれる」という評は、ブラジルの日本移民の存在が文学だけでなく歴史学においてもいまだに十分な注目を集めてこなかったことを指摘している。

注目すべきは、日本移民という「新しい」テーマをブラジル文学にもたらしたことを称賛した *Nihonjin* に対するコメントが、その約30年前に上映されたチズカ・ヤマザキの『ガイジン』に与えられた評価を繰り返していることである。そもそも、さまざまな文化的背景を持つ移民を受け入れてきた多民族国家ブラジルは、その多様性から想像されるほど、移民に対する関心は高くない。筆者はその大きな理由として、「同化へ向かう力と同化を価値とする考え方」（平田, 2009, p.45）が挙げられることを以前、指摘している。

最後に児童文学の分野で活発な創作活動を行っている日系3世のルシア・

ヒラツカ（1960- ）について触れておきたい。学生時代、福岡教育大学へ留学した経験があるヒラツカは、そこで日本の絵本について学んだ経験を生かし、宮沢賢治の作品や、浦島太郎など日本の昔話を数多くポルトガル語に翻訳している。ポルトガル語で創作童話も書いており、2008年には、日本人のブラジル移住100周年を記念して*Os livros de Sayuri*（サユリの本）を出版している。これは、現時点で、日本移民をテーマにヒラツカが書いた唯一の作品である。学齢期を迎えた少女サユリを語り手として、第2次世界大戦が勃発し、ブラジルで日本語教育や使用が禁止された暗い時代について物語られている。この作品が2009年度「にっけい文芸賞」（"Prêmio Literário Nikkey"）[5]ポルトガル語部門で入賞した際、審査委員のヨウジ・フジヤマは、「一見、子ども向けの本のようであるが、読み進むにつれて、それがより複雑なテーマをもち、おとなも関心をもって読むことのできる本であることに気づかされる」と高く評価した（平田、2012、p.62）。

その数は多いとは言えないにせよ、ブラジルの日本人／日系人をテーマに創作され、批評に耐えうる文学的価値をもった作品は存在する。これらの作品を忘却の彼方へ埋もれさせないためにも、また、あらたな作品の登場を促すためにも、これらの作品に対して多様な読解を試み、作品の世界観を広げることが今後の課題である。

注

[1] 「ブラジル文学」に含まれる作品の境界線がどこにあるかという問題は、日本だけでなく、イタリアやドイツ、シリア、レバノンなどからブラジルへ移住した人たちが母語で書いた作品の分類の問題と合わせて十分な議論を行う必要があるが、本論の主旨から離れてしまうので、ここで「ブラジル文学」とはブラジルにおいてポルトガル語で書かれた文学作品の総称とする。

[2] 代表的な例として、詩人で作家でもあるマリオ・デ・アンドラーデ(1893-1945)の小説*Amar, verbo intransitivo*(1927)に登場するタナカが挙げられる。

[3] サンパウロのブラジル日系文学会が発行している『ブラジル日系文学会編2015・ブ

ラジル文学翻訳選集』第三巻で、『ブラジル日系文学創刊50周年記念号』として出版された。日本語への翻訳はブラジル在住の中田みちよと古川恵子が行っている小説る。

[4] コメントは、すべてサライヴァ社の公式ホームページに掲載されたインターネット記事から抜粋しており、筆者がポルトガル語から日本語に訳した。

[5] 「にっけい文芸賞」は1968年、ブラジルの日系社会における文学活動の活性化を目的として、ブラジル日本文化福祉協会（文協）によって創設されたものである。なお、文協はサンパウロ市リベルダーデ区に本部を有する、ブラジル日系社会の中心的機関である。

参考文献

Fausto, Boris, org. *Fazer a América: a imigração em massa para a América.* São Paulo: EDUSP, 1999.

_____. *Historiografia da Imigração para São Paulo.* São Paulo: Editora Sumaré: FAPESP, 1991.

_____. *Negócios e ócios: história da imigração.* São Paulo: Companhia das Letras, 1997.

平田惠津子「ブラジル文学と移民—オルガ・フテンマの場合」『世界文学5 大阪外国語大学における世界文学の教育と研究』、大阪外国語大学世界文学研究会編、pp. 123-140、2000年

_____.「オルガ・フテンマーカメラを通して見つめるまなざしの変化」『ブラジル研究』第5号、大阪大学世界言語研究センター ブラジル研究会、pp.31-48、2009年

_____.「作品紹介：ルシア・ヒラツカ『サユリの本』」『ブラジル研究』第8号、大阪大学世界言語研究センター ブラジル研究会、pp. 61-89、2012年

Hiratsuka, Lúcia. *Os livros de Sayuri.* São Paulo: Edições SM, 2008.

Honda-Hasegawa, Laura. *Sonhos bloqueados.* São Paulo: Estação Liberdade, 1991.

_____. "Um certo Hiroshi passou por aqui." In: *Pátria Estranha: Histórias de Peregrinação e Sonhos.* São Paulo: Editora Nova Alexandria, 2002.

前山隆『異文化接触とアイデンディディーブラジル社会と日系人ー』御茶の水書房、2001年

Nakasato, Oscar. *Nihonjin.* São Paulo: Benvirá, 2011.

Nakasato, Oscar Fussato. *Imagens da integração e da dualidade: personagens nipo-brasileiros na ficção*. São Paulo: Blucher Acadêmico, 2010.

Sakurai, Célia. *Romanceiro da Imigração Japonesa*. São Paulo: Editora Sumaré: FAPESP, 1993.

Shimabukuro, Alessandra. "Entrevista: A comunidade através das câmeras." (Entrevista com Olga Futemma) *Jornal do Nikkey* 4 a 10 de outubro de 2000: p.3.

（インターネット資料）

"A Editora Saraiva tem a satisfação de apresentar o vencedor do primeiro Prêmio Benvirá de Literatura." http://www.benvira.com.br/premioBenvira/vencedor.asp（2011/02/20）

"Professor de literatura vence o Benvirá." In: *PublishNews* - 14/02/2011. http://www.publishnews.com.br/telas/noticias/detalhes.aspx?id=62096 （2011/02/20）

"Primeiro Benvirá destaca Nakasato." http://www.estadao.com.br/estadaodehoje/20110215/not_imp679613,0.php (2011/02/15)

"Romance sobre imigração japonesa vence Prêmio Benvirá." http://www1.folha.uol.com.br/ilustrada/875379-romance-sobre-imigracao-japonesa-vence-premio-benvira.shtml (2011/02/14)

＊ 本研究はJSPS科研費T15K024150の助成を得たものです。